ばってん

事務長会報第45号
平成31年3月31日

長崎県公立学校事務長会
長崎県立長崎北陽台高等学校内
〒851-2127
西彼杵郡長与町高田郷3672
電話（095）883-6843

正月に想う part2

会長（長崎北陽台高等学校） **大野　公一**

「ばってん」には第39号で「正月に想う」と題した寄稿をしていたので、もう役目は果たしたものと思っていたが、２度目の依頼も断り切れず、今回も何を書こうか思いあぐねるうちに正月を迎えてしまった。

今年の正月は、年末の全国高校ラグビー（花園）大会にＢシード校として２回戦に登場した本校ラグビー部の応援から慌ただしく戻り、久しぶりに実家で迎えた。

生まれ育った旧南高来郡口之津町は、平成18年３月末に周辺７町と対等合併し、現在は南島原市になっている。

ささやかな抵抗ではあったが、どうしても「南島原市」というネーミングを受け入れることができず、合併の直前に本籍を居住地の長崎市に異動させた。今でも、新市名は、「原城市」か「有馬市」、もしくは「有江津市」がよかったのにと思っている。

口之津は、その昔は三井三池炭鉱の石炭積出港として大いに発展し、その後、船員の町として知られたところであり、海員学校（現国立口之津海上技術学校）も存続している。

また、島原半島の最南端に位置していて２つの灯台がある。その一つが「瀬詰崎灯台」であるが、日本三大潮流の一つに数えられている早崎瀬戸を挟んで熊本の天草下島と向き合っており、有明海の入口を示す灯台として航海の安全を見守っているそうだ。

この灯台付近は、釣りのスポットとしても知られ、夕日が非常に映える場所でもある。ＮＢＣ長崎放送のＮスタプラス長崎で紹介された「長崎ばーどアイ」の映像などが YouTube にアップされているので、興味がわいた方は一度見ていただければと思う。自然豊かで美しいところである。

この灯台辺りの磯では、「うに」や「がぜうに」、「みな（貝）」がよく採れていて、幼い頃は、母に連れられて来ていたところでもある。

その頃の出来事なのであるが、母から少し離れた場所に一人でいたある日のこと。もう夕方だった。「ゴォー」と大きな音がしてくるので振り向くと戦闘機が低空飛行で近づいて来る。驚いて逃げる足元には弾が飛んでくる。そして逃げ込んだ灯台に続く橋脚の下から見た、夕陽に向かって灯台から遠ざかっていく銀色の戦闘機と操縦席から振り向くヘルメットにゴーグルを付けたオレンジ色の服を着たパイロットの姿を今でも思い出す。が、しかしである。戦時中の頃ならいざしらず、そんな事実はなかったこと位は自分でも分かってはいる。きっと母を待ち疲れ、寝ていて夢でも見たのだろうと思うが、その時のことを忘れることがない。いつか母に確かめてみようと思っていたが、その母も今は亡く、笑える昔話の一つでしかない。

昔話といえば、まだ地元の小学校で勤務していた頃、もう廃刊になってしまった「県教委だより」で事務職員として紹介されたことがある。インタビュー形式でまとめられた記事を読み返してみると、「事務職員というのは存在が薄い。それだけに存在をアピールできるような仕事をしなければならないと思っているが･･･」と言っている。当時、学校事務センター化などの動き（先行実施されていた大阪市学校事務センターの視察に行ったこともありました）もあって、学校で存在感を示さないと職として立ちゆかない。そういう危機感があったのだろうと思う。

そして今、ＡＩの進化によって「無くなる職業」が話題になっている。ある研究によれば、10～20年後に、日本の労働人口の49％が就いている国内601の職業において、人工知能もしくはロボットで代替可能であることが明らかになり、なかでも代替可能性が高い100種の職業の中に一般事務、学校事務、行政事務も位置づけられているようだ。

しかし、ＡＩが行っているのは計算と統計処理だけであり、言葉を理解しているわけではない。

今まさに言われているように、事務職員が管理職や教員等との適切な業務の連携・分担のもと、専門性を生かして、より主体的・積極的に学校経営へ参画をしていけば、職が無くなる心配事は、笑える昔話にできるのではないだろうか。

ふとそんなことを想いながら過ごした平成最後の正月であった。

「学校事務」に携わって

西彼杵高等学校　山口 美登志

35年間「学校事務」という仕事に携わりました。

昭和59年、新任で赴任したのは橋が架かる前の今は無き崎戸町立崎戸中学校。入ったころはその何ぞやも知らず、生徒と遊び、住み込みの先生方や地域の方々とただただ飲み明かした。ソフトテニス男子顧問、少年剣道指導助手、和太鼓グループ、ソフトボールチーム、バドミントン、絵画教室、ママさんコーラスなどほとんど青年団状態でした。楽しい思い出です。事務のほうも西彼杵郡教育研究会と当時の長崎教育事務所は個性豊かでたいへん面白かったです。昔の「長崎荘」や大瀬戸の旅館で手作業の事務作業をさせられたり、とにかくよく集まって活気に溢れていました。

その後時津東小学校を経て平成4年に県立へ転向、五島高校へ赴任しました。旧校舎の狭い事務室で、残業と酒と釣りの毎日でした。そして風光明媚な五島南高校を経て、サッカー王国・国見高校へ。行ったときは国体4位でしたが、のちの日本代表の大久保選手や徳永選手らの活躍で急上昇し、インターハイ・国体・選手権の3冠を達成した時代でした。これまたよく飲んだ。国見に5年お世話になり次は長崎南商業高校へ。4年かけて閉校事務を体験しました。やはり閉校は悲しいものです。最後の生徒たちは良く作業を手伝ってくれました。閉校後、長崎明誠高校へ。工事担当で在籍した3年間、外壁は覆われたままでした。新任事務長になり奈留高校へ。小さい学校でしたが楽しかった。転出後に50周年行事で戻ったときは、運よくサプライズゲストのユーミンと握手できました。

それから西彼杵高校へ。5年間もお世話になり、ここが最後になるとは思っていませんでしたが、今はこの学校でほんとに良かったと思っています。一緒に赴任した福田鉄雄校長とは五島南高校時代の同僚で何かと縁があり、先生が始めた「学びの共同体」を支援することになりました。生徒同志が学びあうと同時に職員間の同僚性も高めていくというコンセプトは意義深いもので、この学校でそれを実感できました。私は最近、通信教育で最終学歴が変わりましたが、今後も生涯「学び」を続けていこうと思っています。これも「学校事務」に携わったお陰です。お世話になりました。

思いつくまま『退職雑感』

希望が丘高等特別支援学校　森岡　昌弘

「昭和59年度に初任者として…」で始まった平成24年10月1日発行の「ばってん」への寄稿から7年目。再びの寄稿となった。感謝！内容もさほどない学校事務退職雑感を。壱岐商業高校で始まった学校事務職人生。「先輩の仕事見よう見真似で、休みは釣り三昧」次の島原農業高校へ。ここでの5年間は濃かった。「結婚・普賢岳噴火・噴石による温室ガラス破損・1ヶ月2度の台風襲来・体育館屋根飛散」事務職として貴重な経験。次はちょっと下って島原工業高校へ。「噴火の影響継続中。プール上屋設置」上屋内が異常に暑かった。それから鹿町工業高校へ。「実習棟改築」温泉が湧いたことには驚いた。しかしその効能を受けずじまい。次に諫早東養護学校へ。「水害被害」事務処理に泣かされる。次は大村高校へ。「台風被害。中庭の樹木倒木」そして長崎鶴洋高校へ。「実習船担当。何もわからないままフカヒレ問題発覚」これが不適切会計処理問題の発端の一因と確信している。そして長崎西高校へ。「校舎改築に伴うプレハブ校舎設置」トイレ汚水が汚水蓋から溢れ出したこともあった。そして事務長として再び壱岐商業高校へ。新任時代育てていただいた恩返しのためにも動いていたつもりだったが、体調の問題もあり、2年で佐世保東翔高校へ本土復帰。学校の変革を感じながら事務長としてできることをやってきた。そして最後の希望が丘高等特別支援学校へ。普通科から職業学科へ移行中。特別支援学校の生徒の将来を保証するためわが事務室も奮闘中。

「すべてはこどもたちのために」あと3ヶ月ラストスパート！

最後に、私は大学卒業時「気くばりのすすめ」という本に出会う。「当たり前なことが当たり前にできない日本人が多すぎる。魅力のある人間とは、当たり前なことが自然にできる人間なのだ」と。現在も30年以上も前と状況が変わっていないことが悲しい。気配りを継続することは、大変なことかもしれないが、これからも魅力ある人間を目指したい。始まりは壱州荒海太鼓。（写真①）

写真①

終わりは希望が丘太鼓連。（写真②）

写真②

仕事もがんばろう

諫早東高等学校　橋口 智恵子

今回なぜか拙文を載せていただくことになったので、事務室のことと、仕事以外でがんばったことを書いてみます。

○諫早東高校の事務室

諫早東高校は、諫早市のはしっこにあり、1学年2学級定員の小規模校ですが、全国大会等上位大会に複数の部活動が毎年出場したり、看護系の学校に進学が多いなど、生徒が元気な学校です。

事務室は4名、今年県教委からはじめての学校勤務となったUさん（事務能力、実行力、コミュニケーション力抜群の3児のパパ）、2回目の現業業務嘱託で、今年度で5年終了のSさん（諫早東の要で、学校のメンテは完璧、来年度がとても不安です）、4年目の業務補助員のNさん（丁寧でテキパキと確実に仕事をこなされます）、そして私（手作りの横断幕をフェンスに貼ったり、生徒の載った新聞記事を玄関に掲示したり…、仕事やってる？）、

というメンバーです。不出来な自分のために揃えてくださったと思われる構成で、毎日本当に助けてもらってなんとか仕事しています。

○がんばってみました

３年前に孫が生まれ、あまりの嬉しさに自分も何か記念になることを始めたいと強く思い込み、保育士の資格に挑みました（なぜ?）。短大を出ていたので受験資格があり、テキストを揃えて勉強を始めたものの、硬まった頭には内容が全く入ってこず、２回失敗、３回目で筆記試験を全科目クリアし、実技試験にもギリギリで合格しました。いくつになっても何かにトライできる喜びを感じたところです。（孫のお守りにも少しは役に立つといいな。）

ということで、仕事ももっと頑張れよ、とつっこまれそうな毎日を過ごしています。

諫早東高校キャラクター 東葉（あずは）ちゃん
（着ぐるみもあります）

とまどうペリカン

壱岐高等学校　**高比良 淳朗**

壱岐高校に赴任して、はや 10ヶ月目となり月日が過ぎていく異様な速さを痛感しております。壱岐島や学校については、過去に先輩事務長さんから紹介があっておりますが、もう１つ追加でご紹介します。本校には卒業記念事業品の一つとしてペリカン像があります。昭和 33 年の事業で校舎中庭に池を造り、池中央には数人の教員が製作した口ばしから噴水する真っ白なペリカン像を据えて寄贈されたものです。長らく生徒の憩いの場でありましたが諸般の事情で、現在はペリカン像だけ残っています。日比谷公園のペリカンを模したそうで、時間をかけて手作りしたことや、なぜペリカンにしたのか当時の自由さや牧歌的な時代が私は好きです。ところがこのペリカンは、その後、幾多の受難を背負いとまどうことになります。いつの時代にも目立ちたがりの生徒はいるもので、卒業式前夜にペンキでカラフルな化粧をされたり落書きされたりして、翌朝の式開始ぎりぎりまで技師さんが塗り直しに翻弄されるなど悪しき慣例があったと聞いております。ある宴でたまたま悪戯をした人に出会い、その時の得も言えぬスリル感と興奮を聞きました。学校にとっては振り回されて迷惑な話なのでしょうが、卒業生仲間には武勇伝として、当時の悪戯は愛情表現だったとのことです。ここ十数年は受難なく、そんな「しょーもない」ことはしないまじめな生徒ばかりです。こんな若気の至りは、自分の時代もあったな（他の同級生です）とヤンチャ話に同調していたら、妙な連帯感が生まれ、当然のごとく深酒でした。幾多の攻防の結果、ペンキの層も厚くなっているものの、今は受難なく平和に生徒の登下校を毎日見守るペリカン像を前にしながら、受難当時に思いをはせている時に、悪戯が多かったあの頃に流行った井上陽水の「とまどうペリカン」の一節が何故かふと浮かびました。～愛してとまどうペリカン～♪。これからもずっと見守ってくださいね。

「鹿工」での日々

鹿町工業高等学校　**中村　律子**

初任校から８校目、初の工業高校に新任事務長として赴任して早１年が過ぎようとしています。勤務期間も優に 20 年を超え、それなりに経験も積んだベテランの顔をしていたのはいつのことやら。久々に新人の気分を味わいつつ慌しい毎日を過ごしているうち、新年を迎えてしまいました。赴任したばかりの頃は、なるほど歴代の事務長さん方はこの忙しさを経験していらしたのだなと、体育館や会議室から事務室に向かう道すがら、机の上に積まれた文書の山を思ってはしみじみとしたものです。漸く少しゆとりができたように感じたのは２学期も半ば頃だったでしょうか。

機械・電気・電子工学・土木技術の４科からなるここ鹿町工業高校には現在 450 余名の生徒が在学しており、部活動やものづくり、資格取得などに熱心に取り組んでいます。全校生徒のうち女子生徒は５名。そのためほぼ男子校のような趣なのですが、少ないながら彼女たちも生徒会やものづくりでその存在感を示しています。

そんな鹿工の生徒達はいつも大きな声で気持ちの良いあいさつをしてくれます。事務室に入る時は自分の名前と用件をきちんと話すことができます。当たり前のことですが、どの生徒も誠実に心掛けている姿勢はやはり素敵です。また実習前の安全点検の一環として行われる「鹿工訓練」では、堂々とした発声と一糸乱れぬきびきびとした動きにいつも感心させられます。良き産業技術人を育成することを目的とし、多くの生徒を社会人として送り出していく工業高校ならではの光景かもしれません。

高校進学の際、ほんの少しですが工業高校への進学も考えたことがありました。「鹿工祭」で工業高校らしい展示や生き生きとした生徒の様子を眺めていると、「工業高校も面白かったかも」と思います。まだまだ余裕があるとは言い難い状況ですが、憧れ（?）の工業高校勤務。新しい環境と立場と仕事を満喫していこう！と考えている今日この頃です。

「ミライon図書館10月オープン ～施設も運営も新たな形で～」

新県立図書館整備室 室長　吉田　和弘

この度は、本誌に寄稿させていただき深く感謝申し上げます。折角の機会ですので、新しい県立図書館の紹介をさせていただきます。

創立以来 106 年、築 58 年の県立長崎図書館が大村市へ移転するため、一昨年４月に着工、去る１月末に竣工し、現在、全国的にもあまり例のない 110 万冊もの移転作業を行っており、いよいよ本年 10 月 5 日には「ミライ on 図書館（愛称）」がオープンします。

県立図書館在り方懇話会設置以来、13 年目にしてやっとここまで辿り着くことができました。これまで関わられた諸先輩方の並々ならぬご尽力の賜物であり、心より感謝と敬意を表する次第です。

まず、この図書館の大きな特徴は、昨年 7 月にオープンしたオーテピア高知図書館に次ぐ、全国で二例目の県と市の合築による図書館ということです。県立と大村市立の施設や蔵書の区分がない一つの図書館として、県と市の職員が共同で運営を行っていきます。

館内の同じカウンターにおいて、職員が県民・市民に関係なく応対し、一つの事務室内では机も隣同士で業務を行うという、ある意味、画期的な、今までにない公の施設の運営の形となります。

次に、施設面について言えば、何といっても、あらゆる分野の人気の本から専門書まで、その豊富な蔵書量です。全国でもトップクラスの 202 万冊の収蔵能力を有し、オープン時には、これも全国トップレベル、九州最大の 125 万冊の蔵書からスタートします。

ＩＣＴ面では、ＩＣタグで全資料を管理し、プライバシーを気にせず待つことなくスムーズに貸出ができるよう、自動貸出機・予約棚等を設置し、更にＷｉ-Ｆｉや無料貸出タブレットＰＣ、蔵書検索機、データベース等も整備し情報検索機能を充実しています。

省エネについては、1 階から 4 階までが吹抜の大空間がありますが、県内初のタスク・アンド・アンビエント方式という方法を採用し、床から吹き出す空調は空間全体ではなく、センサーにより人がいる空間のみを冷やしたり暖めたりします。また、全ての照明がＬＥＤで、天井に照明器具はなく、これも居住空間のみの照明です。

ユニバーサルデザインについては、車椅子に配慮した書架配置、多機能トイレ、対面朗読室、車椅子用可動閲覧机など、関係者からの意見を参考に整備しています。

大村市へ移転することで長崎市及び周辺の皆様には不便をおかけしますが、駐車場（図書館利用者無料）は、23 台から 205 台へ大幅に増やし、県央という地の利を生かして、県南、県北等の県内各地から多くの県民の皆様にご来館いただきたいと願っております。

また、多目的ホール（約 200 人）や研修室（約 80 人）、グループ学習室（6 名 4 室）も併設しており、事務長会をはじめ各種会議・研修会など、県関係の公的利用であれば使用料は減免されます。

ハード以外のソフト面での今後の展望について言えば、県立図書館としての機能・役割として「全ての県民市民がサービスを利用できる図書館」を目指します。離島をはじめ県内の隅々まで、必要とされる資料を届けるということです。地元図書館にない資料をネット予約ができるようになり、県立学校でもこれまでと同様、この協力貸出というしくみを更に活用していただきたいと考えています。

また、「本県の知の拠点」として、貸出のみではなく、県民に役に立つ、新しい発見がいつもある図書館を目指しています。レファレンスもネットから可能になり、学校図書館で対応できない場合は協力レファレンスも行います。図書館に資料としてない情報も、関係する団体、窓口、人などの情報も紹介するレフェラルサービスを充実し、県民の課題解決に向けた活動の支援を新たに行っていきます。

最後に、今秋からの長崎図書館解体後には 2021 年度開館に向けて郷土資料センター（仮称）建設が始まります。新県立図書館の整備は今後も続きます。施設整備という面では、参考となることも多々あるかと思います。施設案内希望やお問い合わせ等があれば、可能な限り対応しますので、今後ともよろしくお願いいたします。

編集後記

センター試験前の積雪もなく今年は暖かい冬でしたが、インフルエンザの大流行で、心配しながら毎日を過ごされたことと思います。

また、自然災害においても、本県には無縁と思っていた地震が時々発生しており、油断できない状況の中、今後は更に危機管理意識を高め、気持ちを引き締めていきたいと思います。

今回、吉田室長様をはじめ、大野会長、今年度ご退職の方々、新会員の方々にはご多忙な中、快くお引き受けいただき心より感謝申し上げます。皆様、心温まる気持ちのこもった素晴らしい文章で心に響きました。

全国の事務長様、退職された先輩事務長様、会員の心を繋ぐ広報誌「ばってん」平成最終号の編集に携わらせていただきました事への感謝とともに、今後も引き続き皆様のご指導とご協力をよろしくお願いいたします。（Y・T）